

〔研究会報告〕

日本マレーシア研究会 関西地区例会報告

杉本 均・信田敏宏

2006年3月11日、京都大学教育学部において、関西地区例会を開催しました。以下、報告要旨と当日の質疑応答を掲載いたします。

サラワクにおける定住狩猟採集民の生計戦略

加藤裕美（京都大学大学院）

ボルネオ島の内陸部では、大規模伐採によりここ数十年で周辺環境の急激な変化を経験した。これにともない、森林内で遊動生活を行っていた先住狩猟採集民も定住を強いられ、焼畑農耕を開始することになった。定住した狩猟採集民の貧困や焼畑農耕民族への同化が問題とされるなかで、彼らの生計戦略を生態人類学的手法によって明らかにするのが本研究の目的である。この点を本研究では3つのアプローチから行なった。狩猟採集民の生活で、もっとも基本的といえる①生業活動、②食事、③現金収入である。

その結果、以下のことが明らかになった。生業活動においては焼畑農耕の導入や猟銃の使用など積極的に新しい技術を導入しており、定住によって狩猟採集活動が衰退しているのではなく、むしろより多様化していること。また農耕を行ないつつも基本的には狩猟採集への労働が重視されていることである。食事において、主食としては伝統的に利用されてきたサゴヤンでんぷんに比べ、新たに栽培されたコメが多く摂取されているなか、これらがほとんど自給ではなく購入に頼っていること。それに対し副食では豊富多種類の野生動物植物を食物として利用しており、それらは蛋白源として彼らにとって重要であること。また、主食、副食、間食を包括的に見た場合、狩猟採集による食物が全体の7割を占めていることなどであり、依然として狩猟採集による食物が重要な位置を占めていることがわかった。現金収入では、彼らにとって獲得が有利である野生動物植物を積極的に販売することによって、賃金労働者にまさる高収入を得ることができている。これらの背景には周辺の焼畑農耕民にとって入手が困難な野生動物植物を、彼らは狩猟採集によって容易に得ることができることがあげられる。

このように、彼らは定住や市場経済への参入など様々な変化に対応しつつ、基本的には狩猟採集活動を継続することによって豊かな食生活と安定した収入を得ている。この点は今まで語られてきた先住狩猟採集民の同化や貧困とは違った側面を示すものである。

質疑応答

- 今回の調査時期は主として6～9月であるが、それ以外のシハン族の生業形態などについてはどのように調べたのか。食事調査のカロリー計算はどのように行なったのか。

主食などの購入ルートは？（小野林太郎氏）→1～3月、5月も面接調査を行なった。それ以外の月は聞き取り調査から分析した。食事調査は集落内の家族についての調査票記入とインタビューによった。食事1回の出現頻度を1として、成人男性の20回を抽出し、カロリー表から算出した。米などの主食の購入は Bintulu などの華人の商店や焼畑農耕民から購入していた。

- 果物の取れる時期以外に狩猟をする場合、キャンプなどを張って出かけて行くことはあるのか。狩猟も採集も不向きな時期の生業はどうなるか。バクンダムが出来たことの影響はあるのか。（信田敏宏氏）→果物の豊富な時期は8月と1月に分かれており、調査時期はそれからはずれていた。採集も狩猟もできないときは漁労かロタンのマットの作成などで収入を補っていた。ダムの完成は、生活圏がその川筋から離れていたもので影響は少なかった。
- シハン族の人口とアイデンティティは何か。他の焼畑農耕民との通婚はあるのか。行政によって定義されているのか？（山本博之氏）→マレーシア全体で145人で、帰属意識は独特な言語から来ている。シハン族はカヤン語は話せるが、その逆はできない。最も古い記録としては1882年の Sarawak Gazette に41世帯、4集落の記録があり、現在は35世帯1集落である。行政や州法によって定義されている。プナン人との通婚はあるが焼畑農耕民との通婚はない。通婚により集落を出れば、そちらの集団のカテゴリーになる。
- 市場への参入が起こる前にも交易はあったのか。市場への参入によって交換の構造は変わったのか。どこに大きな変化があったか？（西芳実氏）（山本博之氏）→市場への参入が起こる前にも交易はあり、塩やタバコを物々交換で得ていた。以前は狩猟は必要な分のみ行ない、たまたま余ったときには交易に当てていたが、市場に参入してからは、現金収入を意識して意図的に必要以上の狩猟をするようになった。
- 要旨には「豊かな食生活と安定した収入」とあるが、7頁のまとめには「多様な食生活」という表現になっている。「豊かな」とはどういう意味か？（山本博之氏）→「豊かな」という内容は、ひとつにはカロリー摂取量が増加していること、ふたつには収入面で現金収入が増えたことを表現している。市場化前は動物肉の比率が大きかったが、最近では植物の摂取量が増加している。
- シハン族の宗教について。教育のあり方について。（塩崎悠輝氏）→キリスト教と折衷したアニミズムで、森に入れない日などはない。宗教はと聞けばキリスト教と答えるが、カヤン人の村からSIBの宣教師がやってきた。教育面では就学率は非常に低く、カレッジに一人女性が進学している。結婚年齢が早く、20歳以前に女性は結婚によって教育から離れるケースが多い。学校に通う子どもの生活と教育の面倒を見るために、祖父母を村近くに住ませていることもある。
- シハン族にとって大きな変化をもたらした事件とは何か。（山本博之氏）→定住が始まったのは1960年代であったが、市場に参入したのは1970年ころである。定住政策は、

森林伐採を奥地まで進めたいと思う政府の意図も反映している。非定住民がいると伐採の許可を与えにくいためである。

英領マラヤ時代のマレー人に対するキリスト教宣教の実態と変遷 —ウィリアム・シェラベアを事例に—

綱島(三宅) 郁子

ウィリアム・シェラベア(1862-1947)は、英領マラヤ時代のマレー語・マレー文学研究者の一人として、特に戦前戦時中には日本の馬來語専攻者の間でも広く知られていた。ただ、生涯を貫く研究情熱の基となった彼のキリスト教信仰および当時の神学的背景と変化、マレー人やババ華人に対する宣教師としての活動を詳述した文献は、日本語では皆無である。一方、英語やマレー語文献では現在でも言及されている。今日では一般に、欧米植民地支配とキリスト教伝道の結託、特にイスラーム圏での宣教活動については概ね否定的に語られ、現在を主軸にした「現地の視点」が尊重され重視される傾向が強い。しかしながら、当時の状況を仔細に調べてみると、植民地官僚と宣教師は必ずしも常に歩調を合わせていたわけではなく、また神学的立場や教派や個人の資質などから、宣教師間でもさまざまな相違や対立があったことがわかる。

例えば、1874年1月20日に締結されたパンコール協約により、ムスリムであるマレー人に対するキリスト教伝道は、事実上、奨励されなくなり、大半の宣教師は華人やタミル人および先住民族への伝道のみに従事した。ところが、英領マラヤで人口の半分を占めるマレー人を「放置」したままでよいのだろうかという考えから、シェラベアはマレー人伝道を志し、マレー語やマレー文学を研究するかたわら、聖書やトラクトの翻訳に従事し、キリスト教の立場でイスラーム研究を行なったのである。結果的に、キリスト教に改宗したマレー人はごく僅かに過ぎず、戦後、マラヤでは予想に反する政治宗教的状況が浮上し、これらの試みはシェラベア側にとって失敗に終わった。

しかし、接触経験を積み重ね、時代の変遷を経るに従い、マレー人に対する態度が、敵愾心から深い理解へと変化していったことは極めて重要である。また、シェラベアの協力者であったマレー人語学教師との人間関係は良好であり、その子孫も現在に至るまで彼を尊敬しているという。この点において、シェラベアは、当時の宣教師としてはいわば進歩的な部類に属している。

人生後半期は、熱帯生活による病のため、アメリカに移住し、コネティカット州のハートフォード神学校で教鞭をとった。この神学校は1911年以来『モスレム(ムスリム)世界』という学術誌を発行し、逝去直前までシェラベアも投稿者および編集者の一人であった。学術誌の副題に注目すると、ムスリムのキリスト教化を主眼とするものから、イスラーム圏内でのキリスト教理解を軸に据えるものへ、そして、イスラームとムスリム・クリスチャン関係を研究する方向へと変化している。シェラベアの晩年の活動は、この系譜の中間

に位置づけられ、マレー半島での現在の微妙な両宗教共同体の関係を考察する上でも、過去における一つの興味深い事例を提供しているといえよう。

質疑応答

- アメリカに渡ったあとのシェラベアとマレーシアとの関係は？(小野林太郎氏)→海上交通しかない時代であったので、再度の渡航は容易ではなかった。
- 雑誌「モスLEM世界」が何度も改称された背景は？(加藤裕美氏) →1950年代の改称は第二次大戦後の世俗化の影響が数年たって及んだのではないか。1970年代の改称は、世俗化した社会のなかでキリスト教はどうあるべきか、という「ハートフォード・アピール」という神学的な動きと関係していた。
- 今回の発表は、英領マラヤのムスリム・クリスチャン関係について、どのような位置づけにあり、どのような知見を与えたのか。問題の設定と結論の間をつなげる裏づけ資料はあるのか。(山本博之氏) →キリスト教によるイスラームへの接触と反発の歴史の中で、マレー人に対する宣教が行なわれていた時代として植民地期を位置づける。ただし、宣教師のマレー人改宗の試みはほとんど失敗したが、その動機として平和共存志向があったことを指摘したい。
- 日本でのこれまでのシェラベア研究に対して、そのような新しいシェラベア像を提示するのか(小野林太郎氏)。→キリスト教から見た宗教間関係(他宗教への態度)全体の中では、宗教的共通項を求める進歩的な姿勢に先鞭をつけた人物としての評価があるが、この研究によってその評価を再確認した。
- それらは宣教がいかにあるべきかという宣教論の延長線上にある議論である。イスラームの観点からは、宗教間関係とは、政府間関係によって処理されるべき問題であり、民間レベルにおいては他宗教との関係については全く関心がない。(塩崎悠輝氏) →あえて仮定の議論をすれば、もしシェラベアがいなかったら、ムスリム・クリスチャン関係はもっと対立的であったかもしれないし、あるいは全く接点を持たずに乖離していたかもしれない。
- もともとのムスリム・クリスチャン関係がどの程度対立的であるという前提に立つのか、その前提の議論にも揺らぎが見られる。(山本博之氏)
- 宮武正道をマレー語、マレー文学の研究者として引用しているが、インドネシアのイスラーム関係誌にインドネシア語で投稿を行っており、ムスリムであった可能性はないのか。(西芳実氏) →ムスリムであったとの確認はできないが、天理大学の前身の組織に所属していたことはわかっている。